

有難いで埋めてくれ 団員の総立で叩：今から、今から。すぐ。

有難いなあ

有難いなあ！ 有難いなあ！

ぽく 狂風の言うのは空理ではない。嘘ではない。僕が有難いから、有難いと言う。何を見ても有難い。どんなことが来ても有難い。

間違つてくれるな。山海の珍味、白木造りのお座敷で、緞子の座布団に、紫檀の机、何千円の貯金を見て、美しい妻に酌して貰つて一ぱい飲みつつ、有難いというのではない。

貧乏な一介の素寒貧書生、本箱買う金がない。今流行の大島とかの羽織もない、着のみ着のまま、よそ行きの洋服がたった一着、他人に一ぱいかけられる、お金をもつて逃げられる。

でも私のよろこびを誰がとる。私の有難いのを誰が妨げる。

何が来ても、何がおころうと、私の有難いのかわりはない。

あなたにも仕事がある、仕事がなかったらどうする。お国のために働けぬ。病気だったとて、有難い。介抱人を何と見る。枕辺の薬をどういう気で見える。あなたの有難い心は、枕辺の身体が健で心の病む者への薬である。病んだとて有難いのにちがいはない。

毎日毎日の食事はとにかく供えられる。私のために犠牲となる、お米や野菜やお魚を、有難いと思わないでよかろうか。食物とる前、拜んでとれ。幸福になつて有難いと言おうと思うのが根本の間違い、有難いと思つたら、幸福になれる。

有難い。有難い。何を見ても有難い。

有難い心になつてくれ。

何を見ても不平言う者

夕食の食膳が並らべられる。

有難い心のないおや爺、お菜がからいとて、妻君に食いかゝる。

「有難うございます。明日の晩から気をつけます」と人の小言を有難がる心のない妻君、かつと怒つて、例の癩癩が破裂する。食事半ばに喧嘩が始り、一、三日中は、家の中が凍みたよう。

おや爺の心に有難い心があるなら、ものの言いようにも程がある。まさか妻君もおこりはせぬ。夫の言いようが悪いとて、妻君が他人の忠告有難がれば、笑話ですんでいる。

お金がなければ不幸、家が小さいのが不幸、子供が悪いのが不幸、勉強できぬが不幸、病があるのが不幸、楽が出来ぬが不幸、器量が悪いのが不幸、いったい、どれだけ道具が揃つたら幸なのです。

雨が降るのが気にいらぬ。着物の柄が気にいらぬ。近所が幸福なのが気にいらぬ。他人が見てくれぬのが気にいらぬ。他人がほめぬのが気にいらぬ。仕事さすのが気にいらぬ。何を見ても不幸の種、いつたいどうすれば気にいるのだ。

人は心の持ちようだ。

御殿の中に住んだとて、大名様にも不平はある。西に日が入るのが気にいらぬ、山の奥の一軒家でも、今夜の月は照りこんでいる。有難いと思えばここそのままが御殿にまさる。

有難い心になれ

有難い心になれ。心の持ちようで、今からすぐに有難いと思つて見よ。その周囲は有難いもので埋まっている

財産がある。家がある。身体が無事。仕事がある。親がおる。兄弟がおる。隣人がおる。それらの人は私の愛を待っている。有難いと思えば何をしても大儀でない。顔色の美しいこと、限の輝きのいいこと、何をするにも飛びたつほど嬉しい。

あなたをあなたとして生かす方法、あなたを幸福にする方法は、たった一つあなたの気持ちを変えるより外ありません。

「それでも」と、もう理窟は聞かなくて結構です。何でも、一口、有難いと言つて下さい。一つ位は見出せます。一つ言つたらあととはつぎきます。それに出発しない以上、あなたの一生は灰色です。さあさあ有難い人になつて下さい。

次は一口でもいい。あなたの周りの人に親切なさい。他人が一口有難いと心から言つたなら、あなたは人を幸福に引込んだのです。心から他人に有難いで邪見の甲をぬがしておやりなさい。

有難いを次から次と宣伝なさい

あなたの周囲の誰にでもいい。有難い心にあなたがなれたら、すぐその気持ちを言つてやつて、その人にも、たった一つ「有難いと言え」と教えて、気分を転換をしておやりなさい。

きつと何を見ても有難くなれます。

他人を有難い心に救はれます。

一人は二人、二人で四人、次は八人、さつそく今日から実行なさい。

目を開いて見る。世界全体、あなたを中心を立てられています。

社会は、あなたが有難いと思えば思うだけ、有難い材料を多く運んで来てくれます。

人の足、人の手、それは私を有難がらせるために出来ています。

さあ、これを読んだ、その時から、あなたはすぐ有難い心の誕生です。

出発なさい。他人を救いに。全我を捧げて。

最大の権威

全我を掲げて、自分全体を捧げて進む者には行き詰りがない。

村が腐つておれば、その村にぶつつかる。心の腐つた夫に全霊をあげて奉仕する。信ずる者のために、火の中にでも入る。全我を提げて教壇に立つ。

白熱である。權威である。

親鸞は全我を提げて法然にぶつつかる。

「すかさされても」と信ずるところ、凡夫直入の救済がある。

「よき人の仰せ」以外に何物もない親鸞、これ以上の權威ある教えをゆるさぬ親鸞。

使徒パウロは

「われ生くるにあらず。キリスト我にありて活くる」の全托に生きた。

全我を提げてゆくとくところ、無我愛に我は白熱する。

罪惡に泣く我等。

猫に頭から灰を一斗あびせかける。プルブルツと身震いして立つ。

水を頭からかける、プルブルツと身震いして立つ。

我等は罪惡に泣く。

罪惡の中から、「これではいかん」と身震いする。

そして立つ。何度でも立つ。

そこに無碍の道味が湧く。

「実業の日本」を読む

可部からの帰路、春霞の中に花は開く。木の芽はふくらむ。

帰りつつ「実業の日本」を読む。

右手に鉄槌、左手に聖書を持つて、山口県秋吉山麓に、大理石を掘る本間俊平の記事がある。

小郡から六里の山奥に一軒のあばら星がある。そこには、不良青年や、監獄出の、誰にも相手にされぬ者どもが本間氏を父とたのみ、夫人を母と仰いで大理石を掘っている。

不平もない。喧嘩もない。

前科者と思われぬほど顔は平和に輝く。

「余が真に青年を愛してをり、彼等の心に感応したならば、心の喜びが自然に顔色に顯れる。もし一人でも人相が宜しからぬ青年があらば、其れは自分の愛が真の愛でないのを証明する。」と氏は言った。

本間氏が旅から帰つて手紙の返事を書いた。七十余通の手紙の内、三十余通書いた時、しきりに居眠りを催した。夫人をよんで、

「こんな時、認めた手紙には熱誠がこもつておらぬ。熱誠のこもらぬ手紙を人に差上げてはならぬ。」とて二十余通ごとごとく焼き捨てさせ、すぐ祈祷した。至誠の輝きを認めて、再びペンを取り、七十余通を全部書いて眠られた。

警部をつとめたことのある、恐しい監獄出が氏のところに来た。ある時、無理な申出をして聞かれなかつたことに対して腹を立てて「何、是だけ言うても聞かれないな

らば……」とて出刃包丁を取り出して夫人の左の腕に深く斬りつけた。夫人の顔色は動かない。深い傷、血潮の送る右手で押えながら、声も朗かに讚美歌は唱えられ

る。「恵の光は我行きなやむ暗地を照らせり。神は愛なり。我等も貴き、み神を愛せん。」

貴き生命を奪われんとする時さえ、恵の涙は光る。全我を提げざる者の權威。

急報に接して本間氏は帰った。悪漢の前に立つて大喝一声、「是れ！ 汝の罪は赦されたり、自らした事は、自分で始末せよ。家内を早く医者つれて行け。」斬った大悪人に夫人を托して医師のもとに送る本間氏。大罪人は改悟した。生れかえつて、今は立派な実業家。

全我を提げてのぞむ者の權威。

野次馬

我が同胞花岡静人君が郡青年大会に、「無言の響きに聞け」と題して演壇に立つ。開会の初めから野次三、四匹、会場を汚す。花岡君立ちてまず、野次を平げて曰く、

「今日は郡青年大会であります。光荣ある本会に野次がいることを遺憾に思いません。野次は人格の下劣を証明します。慎んでほしいと思います」

野次は頭を下げて静まる。野次は一言に平らげらるべき弱さを有するのみ。野次は人格の下劣の自家広告である。一見何物をも恐れざる大胆さを有するが如くなれども、たとえば、凧に措かれたる児雷也の絵の如し。吹けば飛ぶ。至つて軽い。破るに一つの鉄拳を要しない。群集心理の風に乗つて上り騒ぐ。

されど時に真面目なる努力を唯一語で台なしにする。零にする。

真面目なる路傍伝道に声をからし、涙を注ぎ、熱弁に群集を酔わすこと数十分、最後に、野次一人「アーメン」。群集はどつと笑う。数十分の努力が水泡になる。真面目な社会から野次を葬らねばならぬ。權威ある、厳肅なる人の前には彼等は至つて弱い。

冷たき傍観者

懐手して立つ者、土偶の如く。

野次と、懐手して立つ者とが増えれば家も亡ぶ。国家も亡ぶ。

二、三の青年、彼方、此方に走つて、準備に活動する。数十人の青年、冷やかに見て立つところ、青年団の意義は根本から無くなる。

真面目なる先生一人、棚の整頓をする。便所の清潔に気を配る。他の同僚、相顧みて冷笑傍観するところ、学校訓育の根底からの破壊である。

冷たき傍観者は千人いるとも土塊の列べるに等し。

感激なき国は亡ぶ。

感激なき家は平和と幸福を失う。

感激なき人は感謝から遠ざかる。歡喜から緑が切れる。

頭脳は少し位悪くても、学校では成績が少し位劣つても、感謝に活きる人は、優等生の肩書ある冷き傍観者よりも尊重する。感激のあるところ何かが出来る。野次は方向転換をするところ、すぐ罪なき発憤者にかわる。けれど冷たき傍観者は、腕を組める冷たき批判者は、それに冷たき血をわかす精神的靈薬の注射をしない以上、救われる見込みはない。

権威を持つて臨め

権威を持つてのぞめ。

全我を提げて進め。そこには最大の権威が表われる。最大の権威をもつて、全我を提げて立て。その前には、何物も解決する。何物も平伏する。

和氣清麻呂、全我を提げて神勅を聴く。権威をもつて、「開闢以来君臣の分は定まれば。道鏡何する者ぞ……。」と、悪逆無道の道鏡に宣告する。

数十万の尊氏兄弟の軍勢に、数百騎を持つて死を覚悟して湊川に戦う正成。

主君の仇を報いるためには、汚い足の指の間の肉まで食った大石義雄。

「かくすればかくなるものと知りながら止むに止まれぬ大和魂」その大和魂をもつた吉田松陰、乃木大将、西郷南洲。日本国史は、全我を持つて進んだ者によつて輝いている。構成を持つて立て。

チュウラ、フウラのなまくら腰、それでいったい何が出来る。

どつちでもいいのなら、しないがいい。やるほどなら、自分全体、捨ててかかれ、喧嘩もいい。あえて問う。お身は心の底に、正義擁護の私心なき全我を提げた者の権威を持つて争つたか。いたずらな感情でもない、理窟でもない、我を立てない者の平和と秩序と愛とを持つて臨んだか。

「そんなことが出来るものか。」という前に、まず、全身に力を入れ、心全体を打ちこんでやつて見る。どうにか出来る。常に自分全体を投げかけてゆけ。

歡喜

たつた一口有難いと言つてくれ。

たつた一口、他人に有難いと言わせてくれ。

「あなた有難うございます。」と他人があなたに言えば、言つた人も、言われたあなたも有難くなる。

有難いとたつた一口言つてくれ。

そこには三千世界を一度に動かす不可思議な深い深い力がある。

有難いとたつた一口あなたの周囲の人に言はせてくれ。

何をしてでもいい。あなたの有難みが増してくる。

あなた、有難いと一口言つてくれ。

そして、それを次から次と伝えてくれ。

村も有難いでうずめてくれ。

家も有難いであうずめてくれ。
日本中、世界中、有難いであうずめてくれ。

現実主義(3)

□ 一番はつきり私たちに知られているものは現実^{いま}である。過去はもう逃げ去つて再び捕らえることは出来ぬ。明日来年未来は、どんなものだか知ることは許されぬ。明らかに、確かに知られるものは現実ばかりだ。だから私たちは現実に生きたい。今、今と、今に力を入れたらいいという気がする。

× どうして立派な人になろうか。どうして生き甲斐のある生き方をしようかと、現実に全身の力を入れる人は尊い人だ。私も現実のみに生きようと思った。ただ現実を、ただ今日のことばかり考えて、汗のある限り、涙の限り、血のある限り、働き、愛し、赦して生きようと思った。

□ それが出来なかつたのか。

× 出来なかつたのだ。死があるからだ。人間にとって死より確かなことは又とないのだ。私はあることで死ぬることを考えて身震いした。死を考えないで平気である私を見出した時、無智な私に愛想が付きた。

□ 人間が死を考えるのは弱いことだ。

× 人間が死を考えることは尊いことだ。何故なれば、死は生きとし生ける者の免るべからざる運命だからである。雨降れば雨具の用意をし、冬来れば綿入れの用意をし、明日のために食の用意をすることは人のなすべきことである。死は確かにある。誰にも一度は。その動きのない確かな事実について考えることはこの上もない賢いことだ。

□ それもそうだなあ。そんなに死を切実に考えたら、一切何もしたくないようになりはせぬか。

× 生きていることは一切灰色に見える。腹の中に腫物が出来て、明日は大手術を受けて腹をたち割つてもらおう者に、今日何が出来るだろうか。何物をもつて来ても間にあわない暗黒があるばかりだ。

□ それでは人生はどうなるのだ。ただ、死におびやかされて生きるのなら幸福は人生に無いではないか。

× 多くの人は幸福そうに暮している。けれどそれはたいがい死を忘れているのだ。生きる生きると言つてしていることが、死の国に近寄る仕業であることを忘れての幸福である。

人生の目的は何か。その問いに対して、ペンサムやミルは「幸福だ」と答えた。けれども人生の目的は幸福だろうか。

人生五十年、善も悪も、老いも若きも、一切をあげて死に到達する。

一切の幸福という名のつくものを木端微塵に打ち壊してゆく権威は死の一語である。

今日一日を清く尊くと、汗と血と涙に生きようと願つた私は、死の鉄槌をもつて唯一撃にやられてしまった。

□ 今日一日を尊く、清く、涙もて愛せよ、汗ある限り働けよ、という教えは間違いか。

× 間違いどころか、いい教えだ。今日一日の幸福は、今日一日の感謝にある。弱き者のために泣け。親なき者のために泣け。暗い運命の者のために泣け。

身体がつづくかぎり、汗を玉のように流して、親のために、人のために働け。今日一日、生きていることに涙ぐめ。

幸福、真の幸福に、生きかえりたい者は、自分え。

全くその身体を汝の周囲に住む人に奉仕するために、汝の周囲を浄めるために使え、かくしてのみ、汝の不幸は、たちまち幸福にかわる。

□ それが何故死の鉄槌をもつて一撃のもとにやられたのだ。

× 死は一切の最後だと思つたからだ。

私は死によつて、愛しもし、愛されもした人を失い、かき消すことの出来ない色々な願い、例えば、もつと父を幸福にしてやりたい、例えば弟妹を幸福にしてやりたい、例えば、全て生ける人間たちが蒸しかえるように苦悩の坤きをあげている、あの人たちを救いたい。果てもない大きな願いが、小さな私の内に湧いて出る。それなのに、今にも死が来れば、私はそんな願いを皆、捨てねばならぬと思つた。

もつと深く、年々に、私の霊に、そうした願いが深くなればなるだけ、不思議にも、私自身の心が、私自身の心を見つめ、にらみつけて、

「何という汚いお前の心だ。」

お前は又、呪つた、

それ、又、お前は虚言を言つた。

お前の目は何を見る。

.....

.....

お前のしていることは全部が汚れている。」と言つている気がするのだ。

私はこのままだったら、どうしても、いい報いは来ないと思つた。

今のままで、死の暗闇に引き込まれることは、たとえようのない寂しさであつた。恐しさであつた。私の内を見つめてのこの寂しさはどうすることも出来なかつた。私にとつては死は一切の破壊であつた。

□ それから救われる道は？

× それから救われる道は、死が一切の破壊でなく、死は最後でなくて、死は永遠の都に生れることであり、私の色んな願いが全部成就されるところであり、一切の調和と、荘嚴と、平和と、光明と、慈悲とに輝いた世界でなければならぬ。

浄土。

如来。

唯このままで、信の一念に我は直ちに如来であり、我が住む所は諸々の功德を持つて荘嚴された浄土であり、死は、この事実は何の関係もないことが知られた時、私は全てのものの見方がちがつて来た。

□ やはり君は未来主義だな。

× 未来主義と一口に言ってしまうことは、概念の世界に住む人たちが、手っ取り早く信仰に生きる人をかたづけしてしまう言葉なのだ。

唯、現実でもない。未来でもない。過去でもない。過去未来現在三世にわたつての私、その私は久遠の過去世を有して、現実に生きる。現実には飛んで過去になる。その現実には、未来世の根本解決によつて、輝きの、感謝の、大安心の、現実となる。かくして力強い、現実に生きるのだ。

現実には、過去を解決し、未来を絶対に解決することによつてのみ、真に意義ある現実が生まれる。

□ 例をあげて言ってくれ。

× 明日、未だ見ない慈愛にみちた父が迎えに来てくれることを楽しむ子供と、あらゆる苦しみの中に助ける者も来てくれぬ子供とはどちらが幸福か。

□ 現実、今日において根本の差がある。同じ苦の中にいながらも、一人は歓喜に胸がおどるだろう。一人は絶望に泣くだろう。

× 現実に苦悩が増せば増すだけ、一人は、泣きながらも歓喜がいや増すだろう。一人は、より深い悶えに沈むだろう。

□ わからぬことがある。

「愛したい、慰めたい、努力に、奉仕に生きたいとの願い、感謝も、歓喜も、死の一事に木端微塵に打ち砕かれた。」と言つた。それがどうして、如来になることによつて、取り返されるか。

× ただ単なる道徳でもなく、人からの教えでもなくて、私の内に湧き出す、何物とも知れぬ力として、善を求めた。愛したい。赦したい。奴僕のように、汗に生きたい。清浄に聖人の如く、生きたいと求め願つた。今も亦、その心を消すことは出来ない。けれど翻つて、私の内を見つめた時、この願いが盛んになればなるだけ、罪悪、煩惱にどうすることも出来ぬ私が明かに知られて、私はこの二つの世界があることに又も泣かねばならなかつた。

○ 善人、否、聖者にまで、

○ けれどお前は八万四千の罪悪の器、

この二つの世界が私を苦しめた。結局、地上のあらゆる人類はこの二つの世界に生きねばならぬのだ。皆、一人残らず凡夫なのだ。聖人はいないのだ、そのままでは。

□ では聖者とは。

× 聖者とは凡夫なることを知つたのだ。そうして、この二つの世界をいよいよ深く見つめて行つたのだ。だから苦しみにぬいたのだ。

「聖者にまで。」と深く入れば入るだけ、罪の器だということに泣きながら、努力精進に生きたのだ。

聖者の道は、険しい。細い。そして際涯なく遠い。

私が聖者になれようか？

何という大胆だ！

何という空想だ。

そこに私たちの絶望がある。

□ 早く言ってくれ。その次を。
× けれどここにたつた一つの不可称、不可説、不可思議の世界が求められた。全くの転回である。

「善人なほもて往生をとぐ。如何にいはんや、悪人をや。」
悪人ならこそ、凡夫ならこそ。

「水多きに水多し」

罪悪、煩惱が多いだけ、それだけ功德の多い世界である。何という深い見方だ。何という徹底だ。何という不思議だ。氷はもがけばもがくだけ凍る。氷の力で水にはなれぬ。氷が自分でとけるのではない。氷のまま、そのままが水である。大悲の熱涙の力で。

かくして聖者親鸞は生れた。人間親鸞、人間。人間。私は自然に涙ぐまれる。

親鸞は人間だった！

ああ親鸞がなつかしい。私も人間だ。

□ 早く本問題にふれてくれ。

× 道徳の世界は狭い。道徳、芸術、真理の世界を超越して、もつと根本的な、もつと深い、切れば血の出る生死の大問題は解決した。

私は永遠に生きさせられる。

我は、仏である。

「ただ、自力を棄てて、いそぎ覚を開きなば、六道四生のあいだ、いつれの業苦に沈めりとも神通方便を以つて、有縁を度すべきなり。」

人生は短い。何時死の張があるかも知れぬ。けれど、死は死でなくて生れて往くのである。往生である。

楠公兄弟は七度人間に生れて、朝敵を亡ぼすと言った。

私も亦、この願いを棄てぬ。幾千億度、縁ある生命を救うために、生れ出で、生れかわり、娑婆、地獄、畜生、何の世界でもいい、恵まれたる大慈大悲に生きるのだ。

救われたる者には二種の廻向がある。

往相廻向

還相廻向

心は浄土に飛躍し、還り来つて、有縁の友を救う。

私はどこまでも炭である。しんから黒い。炭のままでは力はない。

火はつけられた。炭が赤くなれば、炭が火か、火が炭か。

我はどこまでも罪悪の体である。しんから、根から罪悪である。

大愛の先手がかかった。

我が仏か。 仏が我が。

「十方の衆生願行成就して往生せばわれも仏にならん。衆生往生せずばわれ正覚を取らじ。」

「仏の正覚の外には凡夫の往生はなきなり。」

我が仏になる外に仏の正覚はない。我は、永劫の仏なり。

□ 何という力強い言葉だ。

もう二つの世界はないのか。

× 「本願を信ぜんには他の善も要にあらざる。念仏にまさるべき善なき故に。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なき故に。」

自己を見つめて泣く中に湧き出る、絶対自由な無限な世界。

聖者もない。凡夫もない。凡夫だと泣いたままが仏である。

二つの世界はなかつたのだ。

死はあつてもいい。死はおそろしいにちがひない。けれど、死のかなたに、大慈大悲に生きる活動の世界がある。いい加減な、現実よばわりをやめよ、三世を貫け。

□ どうすればいいのだ。

× ただ絶対の救いを信ぜよ。

ただ信の一念に、まるまかせの仰信に、鷲の白きを黒くもせず、烏の黒きを白くもせず、兎毛の先ほども残さずに、我全体を、そのままを、弥陀の先手かけての一切向うでととのえた救いに乗托する。

前念命終、後念即生。

往生とは肉体の死ではない。本願を信じ、大慈のみ手の中に入った時、即座に、前念命終、前の命は終り、後念即生、一秒をへだてず、新生命は生れたのである。その間髪を入れず、即得往生である。その時、時をへだてず即時に、大愛の手に撰取されて、不退の位に住す。

ここに大安心の現実が生れる。

こいねがわくば、未来を入れた、永遠の新生命を体験し、大安心に立つたる現実主義者となりたまえ。

有難い

何と思つても生きてることが有難い。苦もある。寂しみもある。泣きもする。けれど結局有難い。とにかく有難い。たたきつければ飛び上るゴム毯のように、人間苦が増せば増すだけ飛び出して来る歓喜の泉。とてもこの有難味は口には出せぬ、ペンでは書けぬ。一人で抱きしめて喜ぶより外に仕方がない。

おいおい何故そんな曇った顔している。あの有難味がわからぬのか。仕事があるじゃないか。食事が与えられるじゃないか。とにかく、家も衣服もあるじゃないか。大慈の中にいるじゃないか。

隻語

私はお座なりの愚にもつかぬ、ひょうきんな滑稽に笑つて暮すにはあまりに深いものを見つめています。

私全体が動くような笑い、私全体が動くような悲哀に、自分を見出して来た者には、安価な、上調子な笑い方には私の全霊はびくともしない。

木の芽も、麦もずんずん伸びてゆく音が聞える。
地の底から湧き出したような温かい恵みで。

一日の仕事に疲れた頭をたれて、裏の河辺をぶらぶら歩きすると、枯草の間から草の香がする。

低く静かに讃歌を誦えると、水の流れが調和して響く。

見あぐれば、半月形の月が中天に光を増す。星が二つ三つ表われる。

静かな夕だ。寂しいなあ。

このままでいい。

ピタッと大きな何かにふれたような夕よ。

「先生！ 懺悔が出来ませぬ。……………救われてはいますのに。」

その声を待っていた。ある時には懺悔しても、その懺悔のおわらぬ内に又、一方から悪い心が膨れあがる。

私はたつた一度、懺悔させられました。それは私が救われていたことを知った時です。したのではなくて、させられたのです。これが悪かった。あれが悪かったというような、空気枕の一角を抑えたようなものではなくて、私全体のそのままを。けれどその後からは、腹を立てたり、悲しんだり、汚い私の出しつづけです。

「懺悔し得ぬ懺悔」に泣いています。

恐しい審判の白洲に立った者、良心の厳しい厳しい責めに苦しんだ者、それのみが、「赦してやる」の一言葉に涙ぐむ。

「若不生者不取正覚」はつきり、たつた一人で、救いに笑む夜。

今日は法然上人の生れた日である。

法然上人は美作の人。九才にして父を亡い、十五才の時叡山に登って僧侶となられた。十八才の時山を下りて、黒谷の慈限房叡空の弟子となられて、一切経をひもとくこと幾度、あるいは嵯峨の清涼寺に、奈良の興福寺に、京都の醍醐寺に生死の大問題の解決に、むづかしい三論に、唯識に頭を使われても、解脱の道はみつからない。その内に、はからずも源信僧都の『往生要集』を読まれて、他力易行の本願は認められ、善導の『散善義』によつて「彼の仏願に順ずるが故に」の絶対救済は得られたのだ。

七百八十九年前の今日、美作はこの聖者を生んだのだ。（四月七日）

今日山に登る。

北の方中国山脈の主脈が屏風のように立つ。頂きには雪をいただく。

南の方、瀬戸内海に汽船が走る。広島が見える。村が見える。

何という壮大ぞ。何という厳粛ぞ。

ああ大地よ、私をのせる大地よ。

「あの谷々の間、海の岸、人間が裁きあつて苦しみあつて生きています。救つてやつて下さい。」

声を限りに叫びたい。私の胸は、歓喜と厳粛で一ぱいになる。桜が散る。春はようやくやく老いてゆく。

「聖者のように尊く生きます先生、私は団費を出していません。今少し待つて下さい。今お金がないのです。私は繩をのうて、それをためて出さしていただきます。今しばらく待つて下さい。」私はただ手を合せて拝んだ。何も言うまい。こんなお方もいて下さる。何をどうしてでも進んで行こう。

団報

会計報告

出費の多い中から団費をお出し下さいましてほんとうに感謝いたします。本月から会計の報告をさせて頂きます。

大正十年度

収入合計 四百拾貳円参拾五銭也

内訳

前年度繰越金 参拾壹円七拾一銭

十年度収入 参百八拾円六拾参銭

支出合計 五百拾四円六拾九銭也

差引不足金高 壹百貳円参拾四銭也

大正十一年度一月より四月末まで

収入合計 壹百六拾八円拾銭

支出合計 貳百五拾四円七拾七銭

差引不足金高 八拾六円六拾七銭

不足金高累計 壹百八拾九円重一銭

私たちは厳しい規約の前に立ちとうございませぬ。どこまでも自由に、そして真実に進みとうございませぬ。私は団費を一定して義務的に納めて戴くことをやめます。そして行けるところまで行きつめて見たいと思います。ほんの少数でもいい、ほんとうに心からの浄財で維持したいと思ひます。感謝しながらお出し下さるお金のみに私は涙と感謝を捧げます。

百九拾円の不足額、ああ、そこには人間のあらゆるきたなさがかくれています。立派なおうちがたつ、立派なお倉がたつ家の若様から三年越、一銭の報酬もないのもあります。本団創立以来一厘の出費もなく、金があるなら出すと言われたお鬚の紳士もございませぬ。親愛なる同胞諸兄弟様それらのきたなさはそれがひいて私たちのきたなさでございませぬ。じつとしてはいられませぬ。

財産を子孫に残すのもいいことです。可愛い子や孫に残してやりたいのは人情の自然でしょう。けれども財産の裏に何かしら（福田？）一緒に残さねば、またたく暇になくなります。先年山崎農学士は「人間の糞つまり病は医者が下剤でなおす。家の金つまり病は、放蕩息子が出て下ろすわ、下ろすわ、痛快に下ろす。これ天の配剤である。」と言われました。

私は、それでも涙の出るほどの感激をおぼえます。無い内からも五銭十銭毎月心掛けて、どうでもいい出費を始末して、生きたお金を出して下さる方のあるのを知っています。寮費以上に出して下さった方もございませぬ。せちからい世の中と人は言う。

けれどその中からも真実のはえぬきを見出して感激しています。御健在に、さよなら。

不言の言を聴く

人間の行くべき道

宇宙最高の権威者でいます生命のみ親よ。み親はその徳において智慧において慈悲において絶対者でございませう。それは如何なる言葉でも言い表すことの出来ない不可称、不可説、不可思議におわします。

私たち人類は長い間、人間にゆるされた浅い智慧、一分間後すら確かに証拠だてることの出来ない智慧、一分間後すら誓うことの出来ない智慧、物の表面だけ見てその本質を知ることの出来ない智慧、まだまだ言い方のないほどの間違いのあるあさましい曇りの来た智慧で、おお、その智慧で、み親の絶対を説こうとしました。何という僭越でしょう。何という冒瀆でしょうか。

又、ある者は、人間に恵まれた、せばめられた、末通らぬ心の清さを捧げて、み親の温かいみ心から感応を受けようと思いました。そして救われようと思いました。

ある者は「私はこの通り清い心で証を立てます。」と言って祈禱いたしました。

ある者は「私は清い心で善い事をいたします。その善をお取りおさめ下さって、永遠の歓びの園に入れて下さい。」と言って善を励もうといたしました。

ある者は山に入つて妻子から離れ、世間からのがれて智慧の眼を開いて、自分の運命をみ親のような永遠なものにしようと思いました。

けれどもそのどれもが私の行くべき道ではなかつたのです。

三つの間違い

私たちは自分というものについてあまりによく知っています。私たちが私たちの内に聖なる願いを見出した時には、私たちは私たちの罪悪に泣き、苦しみに疲れ、死におびやかされ、どうかしなければならぬのにどうも出来なかつたのです。

清い心にもなれませんでした。けれども二、三日で消えたのです。

清い証も立てたのです。けれどもすぐにそれも破れたのです。

善事もしてみたのです。けれども一つの善すらみ親の前に出せるものはなかつたのです。一つのよいことをする間に数知れぬ悪を犯すのです。

冷たい哲理に聖なる自分を見出そうとしてもして見たのです。けれども「定水を凝すといえども、識浪しきりに動き、心月を覷ずといえども妄雲なお覆う、而るに一息追がざれば千載長く往く」のです。

もうどうすることも出来ない時、私たちは「自ら然らしむる」み親のお言葉を聞かされはじめたのです。

それについて私たちは、私の第一の間違いを発見させられたのです。

「お前は自分の力でそれが出来ると思うか？ それはお前には出来ないことなのだ。お前は無始以来のお前の迷いがお前を生んだのだということを知らないのだ。お前は人間という者の約気を忘れている。」との御言葉でした。

そうでした。懺悔はただ懺悔のままに消え、清い心は汚ない心の中に沈み、こうしよう、ああしようと願っても、すぐその次ぎの瞬間に変わってしまふ不定な自分の心でした。それを知らない大それた願いだったのです。

私はまた、第二の間違いを知らねばなりません。私は至尊如来のことをみ親と言っています。私はみ親をみ親として仰いでいかなかったのです。至尊を冷やかに見ていました。私が清い心で願いましたら、私の願いを聞いてくださるみ親だと考えていたのです。私の智慧を私が開いたら仰がれるみ光だと思っていました。何という冷たいみ親の見方でしょう。人間の親子の愛すら、親の方から働きかけるのです。

私の知らないその内から先手かけて、私の如何にかかわらず、血と涙で、私を抱きしめ、「さめよ！ 覚れよ！ 聞けよ」と叫んで下さったのです。大慈大悲のみ親であるからには、この単純な真理のわからぬはずはないのに、やっぱり私を育てあげて下さるまで、その単純な真理のわからぬ私だったのです。

「私は清い心になります。お救い下さいませ。……私は正しい智慧をよびおこして私自身を救いたい。……私は善事をはげんで、功德をつんで聖なるお光を仰ぎたい……。」

何という継子根性でしたでしょう。何という私の大きな迷いでしょう。

私たち衆生は、み親と私とを別々に離して考えていました。私がおらなくてもみ親ほいますし、み親はいますなくても私はあると思っていました。これが根本からの間違った第三でした。

み親の「不言の言」は心の耳にひびきます。

「もしお前を、救うことが出来ねば親だという正覚はとらぬ」

しかるに、み親は十劫の昔に至尊になつていらせられる。私の親となつて下さつてあるのです。

私あるが故のみ親、私を救うことにおいて無量の功德莊嚴におはしますみ親なのでした。

(私は中論の観念可燃品第十を味あわせていただきました。空の理をおいて)

私たちは火と薪を分けて考えていました。火は薪(あるいは炭)を離れてもあると思っていました。火はただ薪によつてのみの火でした。薪は火によつてのみの薪でした。火と薪は同じものでもありません。といつて違ったものでもありません。異と、同じとの中間のものでもありません。

み親という火は、ただ、衆生という私あつての火なのでした。如来と私とは全く異つたものでもございませぬ。又、同じものでもありません。その中間のものでもありません。言語では言えないことなのです。

とにかく、私とみ親とは離して考えることは出来ないことなのでした。私を救つてくださつてのみにますみ親でした。結局私はどうすることもなかったのです。このままがお光に燃えさせられるのでした。

仰いで「ああ」

「不氣の来」のみ親さま。私たちは、あまりにみ親を人間の眼で見っていました。十
万億土に祭りこめたり、仏殿とか、祭壇の上におしあげたりして、偶像としてしか見
ていなかったのです。

けれども私たちはみ親のみ名のあまりに尊いことを知りました。

「涅槃をば、滅度という、無為という、安樂という、常樂という、実相という、法身
という、法性という、真如という、一如という、仏性という。仏性即ち如来なり。こ
の如来、微塵世界にみちみちてまします。すなはち一切群生海の心にみちたまえるな
り。草木国土ことごとくみな成仏すととけり。」

一切世界の衆生の心にみちみちたまう法性法身のみ親は「いろもなし、かたちもま
しまさず、しかればこころもおよばず、ことばもたえたり」私たちが考えることの出
来ないお姿でございます。

「一如より形をあらはして方便法身とまをす。そのおんすがたに、法蔵比丘とな
りたまひて、不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり。」

誠にみ親は、色、形、香を超越したまう、私たちの範疇ではどうすることも出来な
い絶対的絶対者におわします。けれど方便法身のお姿を表したまい、ついに「誓願の
業因にむくいたまいて」報身如来のお姿、阿弥陀如来とおなり下さったのでありま
す。一体にして無量の姿を表したまう報身のみ親様、不生にして私の内に生れたまう
不生の生のみ親様、来らずして来りたまう不来のみ親様、私は全ての言葉をもつてし
ても讚嘆しつくせませぬ。仰いであ、とあきれるばかりでございます。

恵まれた夜は更けてゆく

私は行きづまりのない金剛無碍の白道の上を歩かせて頂きます。

み親の、大悲のみ親の、たのませてお救い下さる先手の一方働きの全ての方便に
よつて、宇宙微塵世界に輝きたまう智慧のみ光にあわせていただきました。

根本実在でおわすみ親に参徹することを得させて下さいました。

私の生命の奥に君臨します、み親の不言のみ言葉を聞かせて下さいました。

私はただ心からの願いに従つて真実に真実にと生きさせていただきました。

罪であろうが、死であろうが、私には問題ではなくして下さいました。

生死の園に居ながら、それがすぐ如来への生きかたとは、何という尊さでしょう。

私は、私自身の、あの三十二相八十種好の姿を、礼拝させて頂きます。

今の私に与えられた唯一の慰安である快い眠りに入らせて頂きます。

恵まれた夜は更けてゆきます。

合掌

(六月九日夜二時)

清く生きようとする願い

清くなろうとする願いを失ったほど哀れなことはない。否、むしろ私は悲痛すら感ずる。

若い同胞よ、どうぞ、固い固い生命の殻を作つてくれるな。中年を過ぎた人間たちが長い間の無反省な生き方のために、自然に悪を嫌う心が麻痺し、善を求める心のうすらいで、その日その日を習慣と因襲に引きづられて生きているのを見ると堪えがたい悲痛をおぼえる。

大きな罪惡を犯した者でも、たとえ社会的に見捨てられた者でも、皆清くなりたいという願いを捨ててはならぬ。清くなりたい願いを失わぬ以上、その前途は祝福されてある。

私たちは力一ぱい高く、力一ぱい清いところに心を遊ばせたい。

出来るだけ、一時間より二時間、一日より二日、出来ることなら常に、清い清いところに心を跳躍させたい。

もつと高く、もつと高く、もつと清く、聖なる天上に心を遊ばせたい。

私たちに何ほどの善の実行が出来ていないことにも、何ほどの実行されていないことにも、かわりない清い尊い想像に私自身を生かさねばなりません。想像力の及ぶかぎり、出来る出来ないにかかわらず、極楽そのままの清さの中に、私の心を遊歩させねばなりません。

靈の固くなつた者にはそれが出来ない。

心の内に開けて来る浄土、輝いて下さるお光は、私のこころした聖なる願いの深みゆくと共に、一層はつきりと拝せられるように思われる。

浄土は善惡からはなれてあるのではない。悪人正機のお救いということを、善惡とはなれて別なところにあるとすれば、それはもう救いではなくて悪魔の声だ。

「悪人ほど可愛い」ということは、悪をせよということではない。

「悪人ほど可愛い」ということが、悪の奨励であるならば、大悲のみ親のみ心ではなくて、悪にさそう悪魔の呪いである。

「私たちの善には毒が雜る」ということは、「だから、お前は悪をせよ」ということではない。私たちのすることは一切、善か悪かにわけられる。私たちはそれを恐れねばならぬ。善と悪に裁判されることを恐れないものに、どうしてお救いが有難からう。真宗の信者は、あまりにこの恐れから遠ざかっている。

悪を恐れる心なしに信心にこりかたまろうとする。そして信心の手渡しと称する末の末の問題を追つて、自分の心を説教者に合わせようとする。ここに彼等の墮落がある。

み親は決して、善惡をはなれて、私を救つて下さるのではない。善惡に裁かれか私、重い重い悪の罪のために泣かねばならぬ私、罪に服せねばならぬ私を、大悲の力によつて、とびこえさせて下さるのだ。

重ねて言う。救いは裁きから（即ち善悪から）はなれてあるのではない。善悪をとびこえさせて下さるのだ、私の罪を代つて受けて下さるのだ。私たちはどこまでも善を求めねばならぬ。どこまでも悪をおそれねばならぬ。

『歎異抄』に

「まことに如来のご恩ということをばさたなくして、われもひともしあしということをのみ申しあへり。聖人のおほせには、善悪のふたつ総じてもて存知せざるなり。そのゆゑは如来のおん心によしとおぼしめすほどに知りとほしたらばこそよきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどに知りとほしたらばこそあしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はよろづのことみなもてそらごと、たはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはしますとこそおほせほ候ひしか……。」

自分のところに、我欲を中心にして他人のすることを見て、あれがいい、これが悪い、と裁きあつています。そのみにくい様を「よしあしということのみ申しあへり」とお言いになつていられるでしょう。私たちの智慧で「あの人がいい、この人が悪い」ということは、正しくわかるものではない。だからこそ、聖人のおはせに「善悪のふたつ総じてもて存知せざるなり」とあるのでしよう。

自分の心にふりかえつて、自分の心のきたない汚れていることには泣いたこともない者が、他人ばかりを見てよいとかわるいとか言つているさまは、私ですら泣ける材料です。

私たちは、朝に昼に夕に、我が心を省みねばなりません。そうして何時までも若々しい靈に生きねばなりません。

動かぬ事実

動かぬ事実はたくさんある。さしあたり心に浮ぶ三大事実を書いて見る。

- 一、生れたことのある者は、一人も残らず病になる。老人になる。死ぬる。
- 二、たとえ、天と地が変り、東に太陽が沈んで西に朝日が昇る時が来ても、私が仏になるという事実にまちがいはない。
- 三、地上で人間にゆるされた最大の権威は誠心である。愛である。燃える生命である。

この三大事実間違ひはない。

人は一切病にかかる、若き者は必ず年をとる、人は一人残らず死ぬる。第一の信条はあまりに平凡である。平凡であつてしかも誰も動かすことの出来ぬ真理である。大聖釈迦如来はこの平凡な真理に動かされて永劫の真理を体得した。平凡を平凡として棄てるところに凡人の悲しさがある。

釈迦が虚言を言わない以上、キリストや、親鸞や法然や龍樹や善導が虚言を言わない以上、否、私が人間である以上、私が仏である、仏になるという事実には動きはない。私が仏であるという事が事実なら、あなたが仏であることにも動きはない。

地上最大の構成は誠である。人間の心が誠に遠ざかっていることと、誠が最大の權威であることとは別である。私たちは私たちの心が誠に遠ざかることを悲しむ。けれども、真実に、より真実に、真実を追うことを忘れてはならぬ。

「信心よろこぶそのひとを 如来とひとしときたまふ

大信心は仏性なり 仏性すなわち如来なり。」

友と別れても悲しみません。家族が死んでも泣くでしょう。私たちには毎日、心の浮かぬことも、よろこばぬこともあるでしょう。けれども、もつともつと深い意味に於いて、私たちは霊のどん底に、尽十方無碍光を有ちたまふ如来の真実をよろこぶ、大安心、大歡喜の上に立っています。

私のもつ大信心は仏性である。仏性とは即ち如来である。

如来は私のたましいの奥殿に君臨して私の内に生きたまう。

如来の光明は、

無量光（はかることが出来ぬ過去をてらし、現実をてらし、未来をてらす、量的限りがない）

無辺光（宇宙に遍満してはてがない）

無碍光（何物も仏の光をさまたげ得ぬ）

無射光（一切これに比すべき光がない）

炎王光（一切の無明煩惱罪惡をやきつくす）

清浄光（一切は清められる。お光の前に醜穢がない）

歡喜光（仏を信ずるものに歡喜があたえられる）

智慧光（一切の愚痴は破られて真実の智慧は輝く）

不斷光（仏の光は一秒のたえまもない、未来永劫に輝く）

難思光（私の計ひや恩ひを超越する、考え得ない光である）

無称光（何という名のつけようもない光）

超日月光（その強さ太陽のおよぶところでない）

である。その思慮に絶し、言説に絶せる仏の光明が我が生命に入りたまひ以上、たとえ、わが心に浮ぶ、煩惱、無明の黒雲が出て来ようとも、どうして、夜の暗さにかえらうぞ。

煩惱の雲破れてはさし出る光の尊さ、まばゆさ。

愚痴の黒雲をも突き破つて出て下さる、炎王光の光の強さ。

怒りの醜いきたない雲を自ら浄化せしめらる、清浄光の美しさ。

ともすれば、つまらぬ小事に泣く涙の内に輝きたまふ歡喜の光。

ああ、歡喜の光、よろこびの光。我こそは地上、たった一人の最大歡喜の持ち主よ。

私たちは救われた。一切をまかせて救われた。私の生命は永遠である。

私たちは、「私は悪人だ」その言葉にあまえてはならぬ。お光は私の内に君臨したまう。私をはなれて仏はない。

私たちは仏を生かしきらねばならぬ。私たちが、事にぶつつかる時、人間味をなめる時、御光は私の内に白熱して下さる。私たちの生命の内にはやむにやまれぬ叫びが生れる。深い谷底にいながら九天の空をのぞむ。そこに私たちの道徳がある。肉を食う、妻をもつ、家をもつ、財産をもつ、しかもそのままが浄化されてゆく。

しばらく世俗にかえって生ける道徳を説く。

曰く歡喜に入れ。

「おのれ、貴様が……」と手をふりあげて妻君の横顔を打たんとする時、又は一つ打った時、一秒二秒、自分にかえれ。手の下には、汝にかわって受けたまう仏あり。悔いて大地に伏して自己の内にはいます仏の声を聞け、

「我、そのまま汝を救う。」

怒る者は、歡喜に遠ざかる。五回を三回、三回を一回、心をつくして怒りに遠ざかれ。

み光を、強く深く受けて、仏の心になりきる時、宇宙には、腹をたつべき一物もないはず、自分が見て気に入らぬとか、嫌だとか思うのは、ことごとく我が妄念よりおこる迷いなのだ。

如何なる理由、如何なる事情があろうとも怒りは絶対に悪である。

私たちの生命から歡喜の光をかくすものは怒りの悪魔である。

財産の貯蓄競争が始まる。財産を貯めるもいいことです。田を買うのもいいことです。けれどこの競争の激しい部落に足を入れて見る。お隣とお隣の何という冷たさだろう。山の境が喧嘩の種。知らぬ間に木が切りとられる。隣の不幸が自分の幸、朝早くから夕おそくまで働くわ働くわ、それもいい。働くのもいい。出来た財産はいつたいどれほど浄められている。

一代、二代、その前の先祖が、貧乏人の膏血をしぼり、他人の田の草を盗み、他人の山の木を切つて、ためて積んだ財産なら、利が利で太れば太るだけおそろしい悪魔のひそむ呪われた御殿。おお財産に囚にされた人間の一生。生きて歡喜もなければ、死してあとに残る福德もない。苦しむために生れたか。子孫に残す呪いを何と見る。出来ることなら豊かに暮せ。けれど、伏魔殿の黄金山で、おびおびして暮すよりも、正しくて貧しきものの安心を学べ。

歡喜に生きんとする者に言う。

曰く、与えよ。

生きて残る、食ふに余る収入の幾分が社会のために使われたか、いらぬ着物、タンスの中で十年も出されない着物を、縫いかえて貧しき人に与えよ。美しい花を咲かせて隣に贈れ。野菜のはつをを近所に配れ。一寸やすませてという人にお茶を一杯い差し上げよ。貰い物は隣のおばあ様にわけよ。かくして積る財産を浄化せよ。他人をよろこばせて我も喜べ。

一つ仕事がある。集った五人は、皆がおうちやくに出来ておった。おうちやくに出来た人間たちはすぐ考える。一つの仕事を五で割って五分の一をすることが一番かしこいおうちやくの仕方である。そしてそこに彼等の平等があり、正義がある。

同胞よ、この論法でゆけば、この五人に歓喜の生まれる時は永遠にないぞ。

心に十字架をおう者とは、尊き血と汗を人類に捧げる者、仏（神）のために生きる者のことだ。

四人の怠ける者に、尊き汗を贈れ。

ただ生きてゆくため以外に、尊き汗をどうにか使え。

彼の国に至る永遠の旅路、めぐまれた道づれの重荷を半分負わせてもらえ。

私にも重荷があるというだろう。私の霊の実感は不思議な答えをこれに与える。

「重い荷の上に、他人の荷を半分受けたら、それだけ、私のは軽くなる。」

心の荷、心の荷を半分助けよ。

心の荷を、身体から汗を出して助けてゆく。そこには生の歓喜が生れて来る。汗を他人のために使え。

でもそれでは自分の損になるというならば、あなたの求めるものは信仰ではなくて、経済である。歓喜ではなくて、計算である。

他人の悪いところばかり目につく者、他人の短所ばかり見える者、そしてそれを、誰にでも、何時も、くさしたい者は悪魔につかれた者である。よく歓喜より遠ざかる。

つとめて他人の長所を見よ。よく腹と立てるところをほつておいて、淡泊なところをほめよ。失敬な奴だと見ないで、純なところを見出せよ。

誰にでもいいところがある。悪い人と言われる者にも、その奥には優しいところがある。人間である以上何かの役に立つ。

くさすよりもほめよ。悪く言うよりも善く言え。人をかげでくさすことをやめよ。

あなたの内に悪魔の全盛を極めている時だ。見よ、他人をそねんで悪く言う女のあの毒々しさを。よろこびの血気なんかちつともない。私が見てさえ鬼に見える。

くさすよりほめよ。（今頃の私は痛切に感ずる。）口先でなら何時でも出来る。心を偽ることなく真に人をほめるには、私自身の心の奥を清めねばならぬ。

怒る心の始末をつけよ。くさすよりほめよ。物に心を添えて人に与えよ。善き汗を他人のために流せ。かくする者はよく歓喜に生きる。とても出来ぬと言えば問題はない。

衷心の願いを妨げる全ての悪魔と戦わねばならぬ。組織と戦わねばならぬ。たった一つの実行。それがこの上なく尊い。